

## Ⅱサムエル17章「主の摂理のもとで」

私たちの周りに起こっていることは、関わる人たちの考えに基づいて動いているように見えます。しかし、その背後にあって、すべてを支配しておられる真の主権者である神がおられ、導いていることを私たちは聖書から教えられています。そのような神の御業を「摂理」と言います。

アブサロムがヘブロンで謀反を起こし、ダビデは急いでエルサレムから離れました。ダビデの助言者であったアヒトフェルはアブサロム側についていました。アヒトフェルの助言は「人が神のことばを伺って得ることばのようであった」と言われていますが、人間的な知恵によるものでした。

### 1. 二人の助言（：1～14）

アヒトフェルのもう一つの助言が記されています。自分が1万2千人の兵を率いて、今夜すぐにダビデを追撃するという提案です。状況を見極めて、良い提案です。そして、打ち殺すのはダビデだけで、兵全員とダビデに従った者たちもアブサロムのもとに連れ帰るということは望ましい結果です。

それでこのアヒトフェルの助言はアブサロムと彼に従っているイスラエルの全長老の気に入るところとなりました。ただし、この助言の内容を見ると、アヒトフェルがすべて指揮を執ると言っています。でも、少し引かかるのではないのでしょうか。

アブサロムがどう考えたのかは分かりませんが、彼はフシャイを呼び出し、意見を聞いてみることにします。フシャイの助言は、このアブサロムの謀反の出来事の中で転換点となります。フシャイは「アヒトフェルの進言した助言は良くありません」と言って、全く違う助言を語ります。

この二人の助言を比べてみると、アヒトフェルの助言は簡潔な言葉ですが、フシャイの助言には多くの比喩が含まれています。前者は短いだけでなく、迅速な行動を求めています。一方、後者は3倍くらいの長さがあり、行動を遅らせることを示唆しています。

フシャイはダビデと家来たちが力強いことを強調し、用心して攻撃する必要があると勧めます。その上で彼の助言は、全イスラエルから兵を集めて、アブサロム自身が大群を率いて戦いに出るということです。彼は言葉巧みに進言し、その助言はアブサロムの自尊心を満足させるものでした。結果として、フシャイの助言が採用されることとなります。しかし、そこには主が働いていたと著者は語ります。「これは、主がアブサロムにわざわざをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれた助言を打ち破ろうと定めておられたからである」。

それはまた、ダビデの祈りに対する主の答えでもありました。「アヒトフェルがアブサロムの謀反に荷担している」との知ったとき、ダビデは神に祈りました(15:31)。この祈りの後に、フシャイがダビデのところに会いに来て、ダビデはフシャイを「あなたは私のためにアヒトフェルの助言を打ち破ることになる」と言って、エルサレムに戻っていたのです。そして、不思議なことにアブサロムがフシャイの助言も聞くことにしました。主の御手が働いていたことを知ることができます。

### 2. 助言者たちのその後（：15～23）

フシャイは軍議の出した結論は分からなかったようです。それで、ダビデが手はずを整えていた通りに、祭司ツァドクとエブヤタルに伝えます。もし、アヒトフェルの助言が採用されたら、すぐに追手がダビデたちに迫ることになるから、急いで今夜のうちにヨルダン川を渡るようにとの伝言を伝えさせます。

祭司たちからそれぞれの息子たちに伝え、息子たちがダビデのもとに伝えることになっていました。ところが、その二人のことをある若者が見て、アブサロムに告げました。二人は急いで去り、バフリムまで行き、そこに住むある人の家の庭の井戸の中に隠れました。アブサロムの家来たちが二人を探しに来ましたが、その家の主人の妻は二人をかくまいました。こうして、アブサロムの家来たちに見つからずに、二人はダビデのもとに行き、伝えました。こうして、ダビデのもとにいたすべての者たちは、夜明けまでにヨルダン川を渡りました。もしアヒトフェルの助言が採用され、そのことをダビデが知らなければ、追撃隊による攻撃を受けて、敗れていたかもしれません。こうして、フシャイはダビデから依頼された役目を果たすことができました。

一方、アヒトフェルはどうしたのでしょうか。23 節。彼は先を見通すことができる人でしたから、自分の助言が採用されないとなれば、アブサロム側に勝利はないと考え、裏切り者である自分はダビデに滅ぼされると考えたのでしょう。それで、自ら「首をくくって」死んでしまったのです。

自分の知恵だけに頼り、神である主の前に歩んでいない者は、その知恵によって成功することもあるかもしれませんが、知恵によって自らを滅ぼしてしまうこともあるのです。

### 3. 両者の陣営（：24～29）

ヨルダン川を渡ったダビデの一行はさらに北に約 60 キロ進んで行き、マハナジムに着きました。こうして、ダビデたちは態勢を整え、戦略を考える時間が与えられました。

その頃、アブサロム陣営は、全イスラエルから兵を集め、軍団がヨルダン川を渡り、ダビデの後を追います。ダビデ王のもとではヨアブがイスラエルの軍団長でしたが、アブサロムはアマサを軍団長に任命しました。ダビデの一行がいるマハナジムとアブサロムの陣営との間にはエフライムの森がありました。

一方、ダビデのもとには支援する者たちがやって来ました。27 節に 3 人の名前が記されています。一人目は「アンモン人でラバ出身のナハシュの息子ショビ」です。この人は、10 章で出てきたアンモン人の王「ナハシュの子ハヌン」の兄弟です。ダビデはアンモン人を攻め、勝利した後、ショビをハヌンに代わってアンモン人の王としたのでしょう。

二人目は「ロ・デバル出身のアンミエルの息子マキル」です。この人は 9 章に名前が出ていました。彼はヨナタンの息子で一人だけ生き残った足の不自由なメフィボシエテを預かり、守っていました。その後、ダビデがメフィボシエテをエルサレムに呼び寄せ、いつも王の食卓に連なるようにさせていました。

そして三人目は「ロゲリム出身のギルアデ人バルジライ」です。この人は後で 19 章にまた登場します。この 3 人はそれぞれ有力者です。

この人たちがダビデの一行のために多くの食料などを持って来ました。ダビデたちが「荒野で飢えて疲れ、渴いています」と言ったことを聞いて、すぐに支援の手を差し伸べたのです。彼らはダビデのこれまでの功績を評価し、感謝していたのでしょう。こうして支援者たちによって助けられて、ダビデ陣営は態勢を整え、アブサロム陣営に立ち向かうことができたのです。このことの背後にも主の御手が働いていたことが分かります。

このように、息子アブサロムが謀反を起こしたために都落ちしたダビデと家来たちや家族たちの行く道を主が導いてくださいました。泣きながらオリーブ山を登ったダビデですが、なおも彼に従い、協力し、支援する人たちを主は備えてくださいました。

特にこの章ではアブサロムがフシャイの助言を聞いてみようと言ったこと、そしてフシャイの助言を受け入れたことに、主が働かれていたことが分かります。アヒトフェルの知恵はすばらしいものでしたが、主は彼の助言を打ち破ろうと決めておられました。主の摂理のもとで導かれていました。箴言に「どんな知恵も英知も、はかりごと、主の前では無きに等しい」(21:30)とある通りです。

人が行動します。自然の理由で出来事が起こります。サタンが悪を行わせます。それでも神がすべてを支配しています。そして神は、最終的にはご自身の民を完全に贖い出してくださいます。

その神の摂理のもとで私たちが生かされているのです。決して運とか偶然とか運命ということで諦める必要はありません。私たちには直接的には見えないとしても、神は確かにすべてを支配しておられます。パウロの言う通りに私たちが告白したいのです。「神を愛する人たち、すなわち、神のご計画にしたがって召された人たちのためには、すべてのことが共に働いて益となることを、私たちは知っています」(ローマ 8:28)。この信仰によって出来事を受け止め、神の摂理を信じ、神への信頼、従順をもって対処していきましょう。その時に喜びが与えられます。